

月とオルガンの宿



grasshouse



思い切って待望の4WD車を購入したのに気を良くし、私はその頃、妻の純子に乗せてドライブに凝った。

車が人格を変えるとというのはほんとうらしい。車高が高いので、最初は何となく普通の車よりも偉いような気がして、子供じみた快感を覚えていた。このがっしりとしたぴかぴかの新車は、草食獣が肉食獣に変身する快感を与えてくれた。何しろ高速で長距離トラックに追い越されても、煽られないのが頼もしい。

私はできるだけ町中のつまらない道を避けて、休みともなると多摩や丹沢の奥地の林道や、ほとんど獣道を想わせるような道を走った。林道の樹木の影が、よく磨かれたフロントガラスをなめらかに滑ってゆくのをみる度に、エンドルフィンが全身の血管を巡るのを感じた。

日頃からせっせと買い込んできたアウトドアセットを積み込み、新緑の美しい溪流や、陽射しで温められた白い河原を見つけると、バーベキューとしゃれこむのだ。

妻と二人で楽しむときもあったし、学生時代からの友達を誘うこともあった。当時、日本の景気は、まださほど悪化してはいなかった。三十に手が届こうとしていたがまだまだ新婚気分で、当分は子供を作るつもりはなかった。二人とも、自分たちが無責任な子供でいたかったし、そうする権利があると思っていた。私にとってもいまだ人生は楽しむためのものであり、考え込んだり悩んだりする面倒な隘路ではなかった。

その夏の休暇では、時間がたっぷりあってあるので、少し遠出してみた。

私はある食品会社のマーケティング部に所属していて、東京支社と大阪本社の販促会議を新幹線で往復するという、猛烈な忙しさに消耗していた。

だだっ広い会議テーブルに、偉そうにふんぞり返った小太りの部長たちを説得するには、口と心を別々に動かす特殊技術がいる。彼らは何とかして、商売は数字ではなく誠意だという古くさい信仰を、こちらに押しつけようとするからだ。

私は混沌と揺れ動く購買者の波のゆくえを、魚群探知機を手にした海洋生物学者のように、慎妙にかつ当たり障りのないユーモアをもって、説明しなければならない。

会議の前夜は、覚醒剤がわりのエスタロン・モカを飲み、夜を徹して、膨大な客を幾つかの群れに分け、記号化する。

鰯の群れ、鮪の群れ、鯉の群れ。

グラフを上下に大袈裟に伸ばしたり、楽屋裏の数字をこざかしくいじったりして、紙芝居屋の技術を磨き上げた。つまり私はかなりの程度、嫌な奴だったのだ。

久しぶりに土日がまるごと休め、しかも私は直前になって、月曜日も有給休暇をとることに成功した。こういう時は、肩から数十キロの荷物を降ろした気分になるものだ。ふたりとも計画性

のない旅が大好きで、そんな気質を内心得意がっており、今回も行き当たりばったりというノリにしようと決めた。

私は、天気の良い日に中央自動車道を走って行って、幾つかの長いトンネルを通り過ぎ、いきなり車が甲府盆地に滑り込み、左右が雄大に開けるあの瞬間が好きだった。

アルプスや八ヶ岳を背景として、大きな薄紫色の屏風絵が眺望できる。

どこまでも広がる水色の穏やかな空と、夏の日射しを受けて耀くなだらかな尾根の風景画。灰白色の幾何学的な絶壁がえんえんと続く、新宿の高層ビル街とは大違いだ。

サービスエリアの駐車場のアスファルトに強烈な陽射しが照りつける。

しばし休憩をとり、初夏の高原の風にあおられながら、純子の手作りのサンドイッチを食べた。

ちょうど梅雨が明けたばかりのこれから加速度的に暑くなっていく季節だった。

山梨と長野との県境あたりの狭い山道に入りこんでいるうち、私は次第に普段の疲れが出てきたように思われた。

濃くなった緑が左右から迫り、大きな緑のトンネルのようだった。もうそろそろ、今晚泊まる場所を探さなければならなかった。民宿でもペンションでもいい。もし見つからなかったら車の中で寝てもかまわない。

私はふと、先日の会議で新商品の売り上げ予測がまるごと外れ、ある上司に、軽い皮肉を言われたのを思い出した。

「お前さんのいう鰯の群れは、どこに消えたんだね？」

何日もかけて作成したグラフは、途中で切れたまぬけな風糸のように、虚しく宙をさまよっていた。私は顔をあげて言い返すことができなかった。

「せっかくの休みなのに、どうしてそんな浮かない顔してるのよ」

サングラスをかけた純子が缶入りのアイスコーヒーを飲みながらいった。外人女のように横顔が鋭角的なのが自慢で、よくサングラスをつけたがる。

黒いタンクトップ姿の彼女は、片肘を窓から張り出し向かい風を気持ち良さそうに浴びながら、栗色の髪を靡かせていた。

「そんなことないさ」

「だって、さっきからずっと黙ってるじゃない。あたしといるのが、楽しくないわけ？」

少しおどけて胸を反らし、彼女はいった。

「そうやって、絡むなよ。多分、むかしから自己表現が下手なんだ」

「馬鹿一。まあ、いいわ。それにしても、こんなに緑ばかりだと、不気味よねえ。なんか、緑の海みたい」

そういえば、さっきから私を不安にし、無口にさせているのは、仕事のストレスばかりではないらしい。いちめんの風景を埋めている大量の緑の存在だったかも知れない。

「ねえ、亮。キミもアイスコーヒー欲しい？ ボックスに入れてあるけど」

「いらないよ。お客さん、運転中に話しかけないでください」

私は多少、苛立っていた。

「じゃあ、キスしてあげる」

髪をおさえて、ずっと顔を近づけた。

早朝からのドライブに、そろそろ飽きているのだ。

「やめろよー。ほら、危ないだろ」

私はおおげさにハンドルを左に切ってみせた。その瞬間、緑の林が左右から迫った。

ときにおどけてみても、しばらく沈黙が続く。

周囲の風景は、初夏に向かう多彩な緑の宝庫であった。緑色系の毛糸ばかりで編まれたセーターのように、色合いと濃淡の違う葉群が、山の高さのいろいろな面で、その輝きと生命力を発散していた。山吹の花が黄色い絵の具をたらしたように、山の斜面に続いていた。車の中までも山鳥の音が聞こえてくる。

私は、まったく車の気配のない山道に、とつぜん対向車が現れたらどうしようと、そればかりが気がかりだった。

それに、どうも外側の緑の渦と、内側の鬱の塊とが、微妙に呼応しているらしい。幅の広い葉群の影が、つるつるに磨いてあるフロントガラスをフィルムのようになぞっていく。ゆっくりと風景を眺めたかったが、右に左にうねる林道の向こうから、とつぜん車が現れたら、もう身動きができない。バックするといっても、二台の車がすれちがう幅のある場所まで戻るには、どれほどの距離を戻ればいいのかのさう。

純子はサングラスを外して頭の上に乗せ、地図を開いて指でたどった。

「ねえ、いま疋野村の辺りだよねえ。でも、道が違うみたいなんだけど」

「そんなことはないよ。だって、ずっとこの道一本しかないもの」

不安な気持ちのまま、車を進めるしかなかった。

周囲はときおり覗く溪流と、丈の高い林ばかり。ときどきシイタケを栽培する灰色の丸木が積んであるのが人の気配を感じさせるくらいで、道を訪ねる人も見当たらず、もちろんタバコ屋もコンビニもない。午後遅くなり、ますますしつこい暑さになってきた。私は運転を休んでココロを飲むことにした。アイスボックスを開くと、ひんやりとした気持ちいい冷気が、喉のあたりまで漂ってきた。私は汗ばんで体に張りついているTシャツをぱたぱたさせて、風を入れた。

見渡せば、前も後ろも、何の手掛かりのないような緑の海だった。どうやら、道をひとつ間違えたらしい。この道は地図には載っていないようだ。草叢では黄色い蝶々がもつれ、林の暗がりの中では騒がしく蝉が啼いていた。風で揺れる梢の葉を透かし、強烈な金色の直射日光が目を刺激する。

車から降りた純子は、耳に携帯電話を当てて、しばらくしてから首をひねった。

「だめだわこりゃ、ケータイもつながんないじゃん。ひどい田舎」

「もう三時過ぎになるな。さてどうしようか」

乾いた白い石のひとつひとつが、青い影を背中につけている。私はここに来て、溜まっていた仕事の疲れがでてきたらしく、眠くてたまらなくなっていた。体ごと眠い。「亮ちゃん、さっきからアクビばかりしてるよ。こんなところで、車ごと谷底に落ちたら大変よ。ちょっと寝たら」さすがに勘がいい。

ふだんは多少男っぽくぶっきらぼうに振る舞っていても、要所要所で細かい配慮をしてくれる。一つ年上の姉さん女房は、ときおり看護婦のようにもなってくれた。

私は車に戻って、椅子の角度を下げ、ハンケチを額にかけた。一ところが二十分ほど寝たつもりが、一時間近く過ぎてしまった。時間を大分ロスしている。しかも、天候が先程とはかなり変わっている。

「だって亮がサ、あんまり気持ち良さそうに寝ていたから、起こせなかったのよ」といった。「でもあたし、下の谷川に降りて行って、水に足浸けてきたもん。冷たくて、すんごく、気持ち良かった」

サングラスを頭に乘せたままポシェットをつけた腰に両手を当てて、得意げな顔をして見せた。

それから少し真面目なしんみりした顔になり、低い声で、「働きすぎだよ、キミ、最近」

といて、つま先で私の踝のあたりを、軽く蹴った。

「ああ、わかってる。会社の話はやめよう。……それより、どこか手頃な民宿かペンションに逃げ込みたいな」

「もう、どこでもいいじゃない」

彼女も、走るのに飽きているのだ。

いや、えんえんと続く緑の塊に圧倒され、微妙な脅えすら感じていたのだった。

一時間程前は、じりじりと焼けつくような白銀の太陽が中天に居座っていたのに、いつのまにやら、白い煙のような雲の塊りが幾層もの間隔をあけて、それぞれ速度を違え、尾根の方へと流れていく。霧と雲の間のようなやつだ。心なしか、樹木の葉も湿っぽい暗みを帯びていた。油蟬の声は、先程のいかにも初夏を謳歌しているような活気が抑えられ、周囲を伺うようなとぎれとぎれの油の切れた響きが変わっていた。

しばらくして、空がぐっと重くなり、雨が降り出した。一滴、二滴、うなじに感じると、すぐさま大粒の雨になった。

「山の天気、だね」

「凄い雲が出てきたよ」

「なにこれ。うわア、真っ白」

風景はみるみる変わっていった。劇的、と形容してもいいくらいだ。これでは水蒸気の煙幕だ。

「危ねえなア。ちょっとクルマ止めようか」

車を止めると、すぐ脇の樹の葉に大粒の雨が叩きつけられ、上下しているのが見えた。フロン

トガラスに銀色の飛沫が飛び散り、急に冷えてきた。しかし数分の間にも、雨脚は強くなったり弱くなったりして、ひよっとしたらすぐに雨雲は通り過ぎるのではないかという期待を抱かせた。

前方が、大きく光った。

「雷だよ雷一」

「雷雨と来たか」

黄ばんだ空の一点に稲光が射して、青白く空が明るんだかと思うと、巨大な天の階段から家具でも落としかのような、凄まじい大音響が響いた。

幸い、雷自体はあまり近くにはいないらしい。稲妻が光るとき、周辺の樹木の束がいっせいに伸び上がるように見えた。

私はタバコを出して、カーラジオをつけた。

若手漫才師が、上野アメ横あたりの商店街を歩きながらギャグを言って、店の主人や客の娘を冷やかしていた。どうやら東京方面は晴れのような。リクエスト曲が最新のポップソングから、RCサクセションの懐かしい曲に変わった。

二人は流動してゆく壮麗な自然の変化を見上げて、息を飲んだ。

また、雷鳴が響いた。

五分ほどすると、ひっそりとして雨が止んだ。

しばらくすると、左右に大きく扉を開けるように雲が割れて、もうひとつ奥の空間から、晴れ間がのぞいた。幼いような青空が広がり、木立は葉の先端から水銀のような水滴をしたたらせていた。

車は大量の激しい雨を浴びて、つるつるに洗車された。

私はタバコをもう一本だけ喫い、また細い林道を走っていった。

やがて下りに入り、少し人の気配がしてきた。道は相変わらず狭いが、シイタケ栽培のための小屋がちらちらし始め、土手下には石造りの庚申塚や道祖神のようなものが見えた。

「あ、民家があるよ。やったァ、助かった助かった」

「大げさだなァ。いずれ、どこかに行きつくさ。道路なんだから」

車はぽつぽつと民家の並ぶ窪地のような村落の中に、ゆっくりと入っていった。といっても、溪流沿いの斜面に二三軒ずつ山小屋のような家が立ち並んでいるだけだったが。「人住んでないみたいだよ。なんだか、静か」

「ひよっとして、廃村じゃないか、ここは」

私は砂利道の中、車を徐行させて行った。

「ゴーストタウンだね。誰もいないよ。ちょっと怖い」

「あ、鶏」

道の真ん中に、いきなり二三羽の鶏が現れ、車が近付くと、大げさに羽をばさばささせて、赤いトサカを振り回し、慌てふためいて逃げていった。ふと気がつくと、道路脇の人の背丈ほどの木の枝にも、鶏が二羽ほど登ってきよとんととしてこちらを伺っている。

「へーえ。ひょっとして、野生化しているんじゃないの」 家屋は、重みで押し潰されたように暗く、窓ガラスが割れたままになっており、玄関脇の草は生え放題であった。塗料が落ちて、錆び付いたトタン屋根はところどころめくれ上がっていた。夏草の中に、昔ふうの汲み上げ式ポンプ井戸があったが、その柄も蛇口も真っ赤に錆びついて蔦が絡んでいた。

斜面のところどころの平地には、河原から拾ってきたらしい石が積まれ、庭のようなものが作られていた。河原へと続く、小さな段々畑の跡もあった。

放ったらかしにされたヒマワリだけが、焦げ茶色の種をぎっしりつけて、びっくりした眼のような大輪の花を、幾つもわれわれの方に向けていた。

まるでヒマワリの花に監視されているみたいだ。

「なんか、変な事件でもあったみたいだな。呪われた村、か……」

「やめてよね、そういう話するの。こう見えても、あたしが怖がりなの知ってるでしょ」

「あそこ」と私は、運転しながら、顎で示した。

前方に、小学校の校舎跡らしい建物がある。

「うわァ。かわいい」

私はときおり女たちが発するこの「かわいい」という形容がよくわからない。縫いぐるみやペットや服ならともかく、およそ愛嬌もへったくりもないような粗大な無機物まで、かわいいと評するのだ。

「ほう。人がいるな、こりゃ」

狭い夏草の繁った校庭には、ジャングルジムやブランコまである。

「嘘ー」

「洗濯物だろ、あれ。それに奥の方、電気ついてるじゃない」

「ほんとだ。あ、ペンションだよ」純子は身を乗り出した。「コーヒー&軽食『日蔭テラス』だって。けっこうお洒落かも。喫茶店やってるみたいよ。お店の人いるんだったら、ちょっと休んでいこうよ」

そこまで車を進めて、学校の前で停めた。土手には庚申塚があり、小豆色をした卵型の石は日を浴びていた。校舎の玄関付近はテラスになっていて、パラソルの下には椅子とテーブルが幾つか並べられていた。

車から降りると、雨で打たれて鮮明になった夏草の緑が強い光に照らされ、ぎざぎさに光っていた。



入口のところに、『日蕨分校』と書かれた古い木の看板が見えた。

何度か声をかけ、しばらくすると奥から痩せた背の高い老人が現れた。老人はアロハシャツに短パン、そして団扇といったいでたちだったが、どこことなく粹な感じで、彫の深いなかなか立派な顔立ちをしていた。動作もきびきびしているし、白いものが混じっていたが、眉は黒いので精悍に見えた。

「やってます？」

「ハイ。営業しております」

廊下の暗がりの中で、のろのろと扇風機が回っていた。「アイスコーヒー、いただけますか」

「――お二つ？」

「ええ」

廃村の小学校の校舎を改造してペンションをやっているらしい。ともかく、いきなり人間味のある空間に戻れたので、二人はほっとしていた。しかしこんなところでは、客もめったに来ないだろう。古ぼけたソファの上で、白い猫が気持ち良さそうに寝そべっていた。こじんまりとした猫で、まるで眠り猫のようだ。

「これ、グアテマラのアイスコーヒーです」老人は微笑みながら、二つのコップを持ってきた。「だから味が柔らかいよ。ウチは冷蔵庫がないからね。魚でも野菜でも、裏の井戸か岩清水のところで冷やすんです。ちょうどこの真裏の崖のところでね、かなり冷たい水が湧いてるんですよ」

テーブルには、鳥の形をした模型が置いてあった。木の屑が散らばり、小刀が二本並んでいる。彼は、私たちが来るまでデコイを彫っていたようだ。棚の上には、緑の羽や、褐色の羽を重ねた完成品が、思い思いの方向に嘴を向けていた。私は疲れがとれつつあった。しだいに外の風景が沈んで深い藍色の影を帯びていく。

「以前は、学校だったんですか」

「ええ。……私はここの校長をしておりました。柘植といいます」

「そうなんですか」

純子が顔を輝かせた。素敵な話だと思ったらしい。

「いま、あんたたちがいるところは、旧職員室。隣の小さな部屋が宿直室です。もっとも、小使いなんていないし、教師は私一人だから、私の部屋みたいなもんだったが」

老人は、ククッと笑った。団扇だけは絶えずゆっくりと動かしている。

「もともと私は、この土地の人間じゃないんです。東京の日暮里の方です。道灌山の下。大学は美大を出てね。お堅い小役人ばかりの家だったんで、私だけ反発して、変な人間になっちゃった。絵かきじゃ食えないってんで、先生をやったわけだ。ここは小中学校一緒ですから、何でも教えましたかね。算数、音楽、社会、体育、何でも。若かった頃、馬鹿なこと考えましてね。山奥の学校で、理想の教育をするとか。青臭い限りです。夢ばかり見て、人生を棒に振りましたよ……。一時、アカがかったこともあった。ハハハ。分かりもしないのに、マルクスの資本論

なんて机に置いといてね。しかしロシアも、あんなになっちゃうんだ。世の中わからんもんですわ。昔はここも一応分校だったけれど、こんな山の中、そのうちだんだん子供もいなくなつてね。最後に生徒は中学生の女の子一人だけになっちゃって……」

「ここは、廃村なんですか」

「ええ。だいぶ前にね」

老人は饒舌で、こちらから話かければニコニコ笑って何でも答えてくれた。

校舎の柱とすぐ脇に生えている樺の木の間にはハンモックが吊るされ、これはこれで優雅な生活を楽しんでいるように見える。ハンモックの向こうには、彼岸花が艶のあるオレンジ色の花を揺らしていた。

「もう十年になりますかな。電気も今じゃ止められている。あれは、ランプですよ」

廊下の奥の小さな明かりを指さした。なるほど、ガラスの傘のついたランプである。

純子は案の定、さっそくランプのところまで小走りで進んでいって、「かわいい！」といった。老人は顔をあげ、窓の外を見た。

「だいぶ暗くなってきましたな。今夜はどちらへ？」

「ええ。特に予定はないんです。今日明日と、まったく行き当たりばったりの旅をしようと思つて、山道をずっと走ってきたんですよ」

「ハハア。雷があったでしょう。そりゃあ、大変だったな。もしよかったら、ウチにお泊んなさいな」老人は宿泊料をいった。思ったより、二千元は少ない金額だった。

「当店の名物は、山菜蕎麦と、溪流から釣ってきた魚です。ヤマメとかイワナとか。秋だとキノコ飯が自慢なんだが、いまは季節じゃない」

「いいんですか」

すっかりその気になっている純子は、胸元で小さく拍手する真似をした。「ねえ、そうしようよ、亮ちゃん」

「温泉はないが、溪流の脇に、鉱泉がある。沸かすんです。ほとんどドラム缶風呂に近いようなもんだが。でも、川を見ながら風呂へ入るのも、気持ちいいですよ」

老人は団扇をゆっくりと動かしながら、そういつて笑った。

「あのね。案内、しましょうか。校内を」

「素敵、素敵！」

アイスコーヒーのカフェインのせいかな、私も少し元気になってきた。ソファの上の猫は、しきりに桃色の舌を出して体をなめている。

廃校の内部というのは、不思議な空間だった。黴臭く、その黴の匂いが決して厭ではない。廊下の板は遠くまで鉛の色を帯びて鈍く光り、忘れ去った子供時代を思い出させた。もう外は青紫色に沈んでいたが、蟬は激しく鳴き、先程の夕立で水嵩を増した川のせせらぎが下に聞こえた。

「ここはね、教室です。一階と二階と、まともな教室は二つしかないんだが、私はその日の気分によって、授業の場所を変えた。若かったからね、県の教育委員会のいうことなんて、馬鹿にしてみましたよ。実際、生徒は多いときで十人、少ないときで三人。そして最後はそのうち二人来な

くなっちゃったんだから。ふふふ。理想の全人教育なんていったって、話になりませんよ」

黒板には、ちゃんとチョークと黒板消しが置いてある。壁にはいつぐらいのものか、クレヨンで描かれたチューリップや子犬など子供の絵が貼ってあった。

「ねえ、見て。きれい」

純子が窓から身を乗り出した。

傾斜地に校舎が建っているせいか、眺望が素晴らしかった。陰影の深い夏山の緑の塊。周囲は山に囲まれた窪地になっていて、溪流が銀色のS字型にうねり、その途中で車がやっと一台通れるかどうかというような古い石橋が架かっていた。橋の脇には何かわからない太い古木が生え、枝を張り巡らせて大きな木陰を作っていた。いちめん夏草が繁り、紅色のグラジオラスがたくさんのリボンのような花を垂らしている。ゴーストタウンの寂れた雰囲気と別とすれば、小さな桃源郷といってもいい。さらに二階の教室に行こうとして階段の途中まで昇ると、人の気配がした。若い女の声だ。老人は黙っていた。私は別の客が来ているのだと思った。

「室町時代。足利尊氏――」

壁の向こうから、すっとんきょうな声が聞こえた。

私と純子は顔を見合わせ、ぎしぎし軋む黴臭い階段を登った。

「観阿弥、世阿弥の能楽が、盛んになりました」

その声は続いた。西側の窓ガラスが、夕焼けを受けて、金色に光った。

教室に入ると、その真ん中の席で二十歳前ぐらいの浴衣を着た女が、両手を伸ばして教科書を開いている。彼女は私たちを意識しているらしく、三人が入ってくると、改めて背筋を伸ばし、真っすぐ前を向いて姿勢を正し、「三代将軍、足利義満――」と声を張り上げた。「金閣寺を建てました」

女の浴衣の背中の中帯には、団扇が一本、垂直に差し込んである。浴衣はさっぱりしていて、彼女にはとてもよく似合っていた。

電気がないので、教室はすっかり暗くなっている。校舎全体に蚊がいるらしく、あちこちが痒くなってきた。

「トモエです。私の妻、といいましょうか」

柘植老人は、妙に含みのある笑みを浮かべた。

「実は、さっき申しました最後の生徒というのは、こいつだったんです」

老人は片手をあやふやに伸ばすと、女の背中から優しく声をかけた。

「トモエ、お客さんだよ。ご挨拶なさい」

女はくるりところらを振り向き、性急に「いらっしゃいませ」といって頭を下げた。

老人の紹介をあらかじめ待ち構えていたように思われた。おおげさなお辞儀なので、長い黒髪がぱっさりと降りて、ほっそりとした白いうなじが覗いた。

「えらいねえ。勉強やってたんだねえ」

老人が褒めてやると、女は彼の目をまっすぐに見て、ゆっくりと頷いた。

目が異様に大きく、びっくりするほど美しい女で、もしこの唐突な口調とぎこちない動作さえなければ、知的な美人にすら見えた。純子も意味ありげに私に目配せし、肘でつついた。「……」

掘り出しものじゃん」

しかしトモエという女の挙動をよく見ると、表情や体の動きに不自然な幼児的なものがあり、知恵や精神の発達が普通ではないと思われた。彼女の体の動きには、どこか壊れかけた操り人形のようなところがあった。

「お客様。なにに、なさいますか」

もう教科書などどうでもいいというふうに、後ろ手でパタンと閉じて、われわれの方に向き直り、注文を取る真剣な顔つきをした。

「いや、いいんだ。さっきね、アイスコーヒーを召し上がったから。今夜はお泊りになるそうだよ」

「本当ですか――」

トモエは、あっけにとられたような顔をした。そしてパッと顔を輝かせると、どうしていいかわからないというようにそわそわし、スッと立ち上がった。それから急に真っ赤になり、しばらく考え込むように苦しげな顔で下を向いた。

「柘植先生、材料がない！」

老人を、先生といった。

「だいじょうぶ。ちょうど今朝、釣りをしてヤマメが何匹か下の生け簀に入れてあるんだ。勘がいいだろ。山菜料理も作ろうねえ。それとも、河原でバーベキューをやるのか」トモエは首を片方に傾げて、こくりと頷いた。

彼女は浴衣がけに古ぼけた運動靴というチグハグな格好をしていた。もっともこの山あいの傾斜地では、下駄やサンダルでは不便だろう。その灰色の紐靴は、もともと水色か青色だったが、長く履き古されて埃まみれになり、擦り切れて色褪せてしまったようだ。少し大きめで、DUNLOPというメーカー名がかすかに見える。

――日本人形みたいな色白の顔に長い髪、浴衣と運動靴、背中には団扇、これが彼女のお決まりのスタイルらしかった。

柘植老人は、食事の支度をするとって一人だけ下に降りていった。動作が素早くバネがあり、見ていて気持ち良かった。アウトドアを趣味にしている老人に、よくこんなタイプがいる。

唐突に、トモエは私の脇に寄って来てしばらく観察し、それから打ち明けるようにいう。

「私は、いろんなことを知って、教養を身につけたいんです。そして東京に行って働くの」

大きな黒い瞳が美しいが、視線は宙をさまよっている。「うん。それは……いいことだね」私はようやく、それだけ答えた。

「働いて、パソコン買って、コンピュータが使えるようにするの」

女は指をぱらぱらと動かして、キーボードを打つまねをし、同意を求めるように頷いた。純子の遊び半分のカマトトぶりには慣れているものの、ここまで天然で飾り気がないと、私も対処の仕方に困ってしまう。話題は途切れ、そのままトモエは放心したように、ゆっくりと首をまわした。さっきの白猫が、屋根伝いにやってきたらしく、二階の窓から入って来た。トモエは猫を抱き上げ、自分の顎を乗せるようにして、頭を撫でた。猫は逆に頭を上を押しつけるようにして首を伸ばし、目を引きつらせて細めた。長くて白いしっぽが、心持ち曲がる。

トモエは何かを思い出したように、いきなりパッと両手を開いて猫を放り出すと、またこちら

に来て、膝詰めするようにして、私を見上げた。

「東京の人は、モノをいっぱい知っているでしょう。だから、こんな田舎なんかサ、馬鹿にするんでしょ」

きつい表情で咎めるように二人を睨む。放り出された猫は、ストーンと柔らかく着地して、虫でもいるのか何くわぬ顔で天井を見上げた。次にいきなりくるりと体をひねると、片脚を浮かせて自分の腰の毛をなめ始めた。

「そんなことないわ」純子はいった。

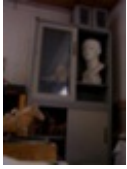
私も苦笑いした。トモエは幼女のように、じいっと私の目を見て「嘘」といった。

私の表情から、何かごまかしを読み取るというふうであった。しかしすでにトモエの関心は、栗色に染めている純子の髪に移ったらしかった。

「……お姉さん、素敵ね。どうしたらそういう髪になるの」

ひとつまみの髪を指で挟み、無遠慮に鼻を近づけ、匂いをかいでいる。指でこよりを作るようにして、数本の髪の感触を調べている。純子は困ったように目を伏せて、されるがままになっている。

次に彼女は、純子のタンクトップの胸の真ん中に差し込まれたサングラスに興味を示した。トモエは自分でかけてみてしきりに感心し、何度も鏡をのぞき込んで、ニヤリとした。そのうち、浴衣がけに団扇に黒いサングラスという珍妙ないで立ちで、校舎内の冒険に出掛けてしまった。



夕食は一階の教室でとることになった。私と純子は、下の溪流に降りて行って、鉱泉に入った。

小屋の脇には薪が積んであった。小さな小屋の上半分が開放され、下の窓は曇りガラスになっていた。浴槽は緑色の自然石を積み上げて作られていた。湯の中で岩の細かい模様が鮮明に見える。ただ、せいぜい二人が限界の狭い浴槽だった。

「ウフッ。野趣にとんでるわね」純子が、窓枠に乳房をおしつけ、溪流の方を見ながらいった。腰のくびれた乳白色の体の輪郭が、ゆらめいていた。

私はぬるい湯の中で、ゆっくりと手足を伸ばした。すでに暗く沈んだ夏木立が見える。川の水が澄んでいれば、北欧のサウナのように水で体を冷やしてから再び湯に戻ることもできるだろう。

残念ながらさっきの夕立で、水は褐色に濁り少し嵩が増していた。

昼間の汗を落としてさっぱりして戻って来ると、すでに柘植老人が教室脇の戸を全部開いて、西側の庭とひとつなぎの空間にし、教室の端を縁側代わりに使うという工夫をしてくれていた。

そのため、ハンモックの吊るしてある檜の樹や、ジャングルジム、ブランコなど、郷愁を誘われる風景に囲まれることになった。雨樋の脇には、ランプを吊るす。その周辺だけが茶褐色の幻のように照らされた。

七輪を置き、串刺しにした川魚を立てた。魚を焼くと、たちまち香ばしい匂いをあたりにふりまいた。脇に並べた飯盒から、しばらくしてぷくぷくと泡が吹きこぼれ、ご飯の炊ける良い匂いがしてきた。

すぐ側には花壇があり、グラジオラスの赤い花が闇の中に咲き乱れていた。まだ草木は水に濡れていたが、打ち水をしたようで涼しい風が流れ込み、ちょうど気持ち良かった。雨樋の脇には、ランプが吊るされ、赤みがかった灯火がゆらゆらと焰の影を投影させている。繁みの中で地虫が鳴いている。

「なんか、凄いいい雰囲気ね。アタリじゃん、ここ」

すっかり純子は気に入ってしまったようだ。膝を抱えて、満足げに首を傾げた。

トモエは最初、熱心に食材を運んできたが、途中で飽きたらしく、ブランコに乗って髪をいじったり、梨をひとつ持って来てジャングルジムの上に登り、そのままてっぺんで齧ったりしていた。

ただ彼女はひどくだらしく浴衣を着ていて、ともすると浴衣がずれて乳房の半分が見えそうになるので、私は目のやり場に困った。

ブランコを漕いでいるときも、両脚をスッと伸ばすたびに裾がまくれあがり、膝の上まであらわになった。下には何もつけていないように見える。

また、一度トモエはジャングルジムの上で立ち上がったまま、梨をお尻にこすりつけてから食べようとしたが、そのときも浴衣がめくれあがり、片方の脚がふとももから尻まで、まるごとあらわになった。夕闇の中でトモエの脚は、白くまばゆく見えた。

「さあ、スタンバイできたぞ。食べましょうよ、みなさん。……さあ、トモエさんもこっちへおいで」

両手に瓶ビールを抱えてきた柘植老人は、七輪の前に腰をかけて、魚の焼き具合を見た。丸い平たい箆の上には、食べ切れないほどの蕎麦と山菜が盛られてあった。

「本当は春なんかね、山菜の天麩羅も、うまいんだ。タラの芽とか、タケノコとか、裏の山からいくらでも採ってこれる。野菜類だってね、ほとんど自給自足で賄ってますよ。畑は勝手に使わせてもらってますから。もちろん無農薬だ」

蚊が出てきたので、トモエがマッチを擦り、蚊取り線香をつけた。小さな赤い火の点から、青い煙が縮れたすじのように延びてゆく。

いつのまにか、檜の樹の根元に、ビールの空き瓶が四五本並んだ。

老人は、奥からワインの瓶を大事そうに抱えてきた。

二人の顔を見て、「今宵は、特別です。イケるんでしょ、お宅たち」といって、指でグラスの形を作りニヤリと笑った。

山の端に、見事な月が出てきた。満月に少し欠ける金色のいい月だった。

「あんたたち、礼儀正しいね。あんまり、人のことは、詮索しないほうなんだ」

老人はしみじみした口調でいった。

「なに、トモエとのことはね、私はこれでいいんだと思っています。しょうがなかったことだ。ただそのために、いろんな人に迷惑をかけた。それは、私が悪いんだ。悪いんだけど……」

トモエは一人離れてブランコに座り、鎖におでこをつけるようにして、低い声で静かに何か哀しげな童謡めいた歌を唄っていた。雲がときどき、月を覆った。

「両親がね、死んだんです。あの、少し向こうで、川が曲がっていて、崖みたいなところがあったでしょう。いまも日蔭に、家だけは残っているんだが、そこで首を吊って死んだんです」

沈黙があった。

「あの、トモエさんのご両親ですか」と純子。

「ええ。実家で内密に出産したばかりの、トモエの子供の口を、こう両手でふさいでね。気がついたら殺してしまったというので、どうしていいかわからなくなった。狭い村ですからね。その夜、二人で相談した後、裏の樹に首を吊って死んだらしい。生真面目な夫婦だった。ま、それだけじゃなくて、奥さんの長患いのため、借金もいっぱいあったらしいが」

「子供というのは」

「――私の子供です」

老人は口をへの字に結び、鉄の箸で網の上の葱をつついた。

青い闇の沈黙があった。

「トモエも、もともと興奮しやすい、神経の鋭どすぎる子だったが、両親が死んでから、ああいふふうになってしまったんです。いまじゃすっかり野生児だ。それでも二、三年は自閉的になっ

て長野の病院にも入り、私のことを拒絶していた」

老人は、腕を組んで、月を眺めた。山の輪郭が月明かりのため、ぼんやりとビロードのように縁取られている。

「尊敬されていた柘植校長がね。フッフ、難しい本を読んで、ゴッホみたいな油絵もかいて、スケッチに行くと村人みんなから挨拶されて。この日蕨村じゃ、何を聞いても百科事典みたいに答えてくれた先生がね。理想家肌の、熱血センセイがね。……孫みたいな娘に……信じられないことをね」

老人は、眉を寄せて黒い箸を動かした。七輪の火が、老人の額を照らし、痩せた首や顎の筋を陰しくさせていた。

「でも私はねえ、今考えてみると、こいつに救われたんだ。この村に来た当時は、妻に愛想をつかさね逃げられて、独りだった。それに、長野の方で組合活動をやったり、裏切られたり糾弾されたり、そんな生活に疲れていた。世間に付き合いすぎて、心が干からびていた」

私は、聞き取れない声で無心に歌を唄っているトモエを見た。

「この辺の村落は、みんな親戚か遠縁だったりするんです。それでもトモエの引き取り手はなかった。忌まわしい事件があったというので、五年たち、十年たちするうちに、前後して日蕨を捨てて、離れた所に越してしまった。私への当てつけもあるのでしょうか。私の愚かさが、ひとつの村を、滅ぼしてしまっただけです。いまじゃもうゴーストタウンだ。電気も点かない。

……だから私は、こうして責任をとって、この廃村に居座っています。恥辱と孤独とを、背負ってね。私は自分をこの山里に幽閉した。こうなったらこの小さな谷なんざ、私とトモエの王国ですよ。猫と鶏しかいないやネ。フッフ。何もそう片意地張らなくてもいいもんかも知れないけど、仕方ない、私の生き方です。トモエの父母の墓を守っている。毎月の月命日には、二人で供養してます。この山の南側に、トモエの家の墓があるんですよ」

私もだいぶ酔ってきた。

さっきはコーヒーでごまかせた体の疲れが、アルコールのせいでまた出てきたらしい。ぼんやりとした頭に、陰鬱な物語が染み込んでいった。

「……夢を持っていてもね、人生、その通りに事が運ぶとは限らない。その夢が、あれよあれよという間に、奇怪な方向に反転しちまうことだってあるんだから。もし、この世に生きていけないのであれば、生きていけるこの世を、自分で作ればいい。そうして私にとって、生きて行ける場所とは、結局この、小さな小さな窪地になってしまったんです。私など、忘れられた廃校の亡霊という役柄が、分相応なのでしょう。……あ、いやいや、これは。若い人の前で、説教じみちゃって申し訳ない」

「いや、いいですよ。今夜はいい月夜ですね」

蒸し暑い風が吹き、草叢で地虫が鳴いていた。

「年取ってくると、人生がますます異様なものに思えてくる。足場がどんどん崩れていく。考え

れば考えるほど、すべてがもっともらしげな悪夢のように思えて来て、深夜寝苦しくてたまらなくなってくるんです。透徹した澄んだ心境なんてものは、私には無縁らしいですな。私なんざ、若い頃のクソ生意気な自惚れをつぶされるためにだけ、生きてきたようなものだから」

しばらくすると、トモエが柘植老人に寄ってきて、何か耳打ちした。彼女はわれわれを上目使いで見て、恥ずかしそうにニヤリと笑った。

老人は、しばらく無言でワイングラスを弄んでから、顔を上げた。

「あのねえ。トモエのやつがねえ、どうも皆さん方を、大変お気に召したらしくてね」

老人は笑った。

「歓迎したいらしいんだ。まあ、どうということはないんだが、歌を唄うそうです。歌っていったって、こいつの知ってる歌しか、唄えんのだが。そのまま、ビールでも飲んでいてください。私がオルガンで伴奏をします」

老人はよろよろと長身を起こして、教室の古いオルガンの前に座った。トモエは気を付けの姿勢をし、手にタンバリンを持ち、何度か節をとるように頷いた。にわか仕立ての辻音楽師の一組が出来上がった。しばらくして、ランプだけの灯る廃校の教室に、ペダルの空気音とともに、かすれたようなオルガンが鳴り響いた。

「……もーおし、もーおし、旅の人ーオ、旅の人」

トモエの異様に澄んだソプラノが聞こえた。

「銅の鳥居を見やしゃんせ。欄干橋を見やしゃんせー。見やしゃんせー」

私の眠い頭には歌詞はとぎれとぎれにしか入ってこなかったが、それは昔聞いたことのある懐かしいメロディだった。

「薊の生ーえたその家はァーあ、その家はァー。あーれは昔のノースカイヤー、あーれは、昔のノースカイヤー、ノースカイヤー」

純子はその歌を知っていたらしい。

私が薄目を開けて「ノースカイヤって何だ」と聞くと、「遊女屋だったと思うわ。売春宿。北原白秋の作詞した歌よ」といった。

谷川の瀬の音だけが響く闇夜に、引き摺れたようなオルガンの音が重なる。

トモエのタンバリンはちゃらんぽらんで、自分の歌にもオルガンの伴奏にも、まったく合っていないかった。

この不思議な歌はどこまで届いているのだろう。

ひょっとすると、この世で私たち四人だけが聞いているのかも知れない。

ここにいると、日々の生活が遥かに遠のいていく。高層ビルに囲まれた販促会議やプレゼンテーションなど、いったいどこの世界の話だろう。

私は今の生活にとりあえず満足はしていたが、かといって、こんな毎日の為に生まれてきたのではないという耳元の小さな囁きを、どうすることもできなかった。

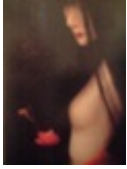
どこから来るのかわからない破綻への欲求が、ときどき地下水のように湧いてきて私を不機嫌にさせた。

山々は漆黒に沈み、灯はまったくない。川の音だけが単調に響く。

少なくとも半径数キロ程は無人だと思われる。闇はあまりにも濃すぎると艶を帯びているように見える。 やがて胃袋もいっぱいになり、すっかり酔ってしまったので、私と純子は「もうそろそろ……」と遠慮がちに申し出た。老人は残念そうな顔つきで、少し哀しげに見えた。

彼に案内されると、東側の小部屋にすでに簡易ベットがしつらえてあって、窓辺にランプがひとつ灯されてあった。

「トイレに行くときは、壁に掛けてある懐中電灯を使ってください」



蒸し暑く寝苦しい夜だった。

一、二時間泥のように眠ったあと、私は暑さと膀胱の圧迫感で目が覚めてしまった。ビールを飲み過ぎたらしい。懐中電灯を用意してくれていて、正解だった。純子は、こんなときも羨ましいぐらいにすやすや寝ている。

それでも寝汗のため、横向きになった顔の口元に、髪の毛が張りついている。

私は、懐中電灯を頼りにしながら、トイレにようやくたどりついた。闇の中で、白い子供用便器が光っていた。雨が降っているような溪流の水音が聞こえる。

廊下を戻ってくると、昼間は知らなかった場所に小部屋があるのに気がついた。黒い表札には「理科室」とある。

懐中電灯で照らすと戸の上に『ニンフの小部屋』と手彫りの板が掛けてあった。柘植老人が見つけたのだろうが、俗悪な名だ。板には絵本のような装飾がされてある。ガラス戸の裏はカーテンが左右から重なって、内部は見えないようになっている。私は妙に好奇心がうずき、湿気で堅くなっている戸を、力を込めて開けた。

部屋に入って壁を照らしてみると、さすがに美術家の生活を物語るように、上から下までたくさんの油絵や水彩画や写真が掛けてあった。そこは小さな資料室のようであった。目の焦点がようやく合ってきて、私は不審に思った。

それらのポートレートは、すべてトモエがモデルであった。

この芸術家は、他のモチーフにはてんで関心がないように思われた。そのうち多くが、生まれたままの格好だった。夥しい白い体が、さまざまな姿態で壁に浮いている。廃屋の台所や、風呂の跡、人気のない暗い仏壇の間、黒光りのする廊下。この廃村では、無人の民家や廃屋には事欠かないので、ロケーションは豊富だった。

しかしそこに柘植老人の身の上話を重ねてみると、何かしら恐ろしい人の気分を逆なでするようなものがある。

すっかり頭が冴えてしまった私は、鼓動が速くなっていくのを感じていた。

たくさんの蚊が、私の足や首にとまって血を吸った。その部屋には、おびだだしい蚊が隠れ潜んでいたのだ。蚊は私の腕にとまり、赤黒い茱萸のようにふくらみ、一瞬でつぶされた。

机の上に、『巴の一生』とだけ書いてある分厚いアルバムがあった。おそらく最初の数ページは亡くなった実の親が撮影した写真だろう。貧しいながら新品のブラウスやセーターを着せられているあどけない少女の写真だ。しかし次のページを開くと、それからずっと成長した中学生ぐらいの目の大きな髪の長い美少女の写真が並んでいた。

しかもその多くがヌード写真だった。崖の前の小さな滝の淵で水と戯れる裸のトモエ。大きな木の股にアリスのようにもの憂げに寝そべり、白い片足だけをだらりと垂らしている少女。トモ

エはまだ大人になりきっていない体をしていた。

膨らみかけた乳房と、小さな桃のような無毛の性器。それは写真日記といって良かった。克明にひとりの女の成長の跡を辿るように、肉体と表情の変化を追っていた。数冊揃っているどのアルバムも、同じようにトモエのおびただしい裸体の記録だった。

そのうち明らかに、撮影者との関係が変化した何らかの出来事があったかのように、モデルは意味ありげな淫靡な笑いを見せていた。

私はしだいに、奇怪な気持ちにとらわれていった。蚊が厭な音をさせて、上から下から襲ってきた。すぐに肩や脚がむず痒くなってきた。

部屋の暗い隅には白い塊があった。それはミロのビーナス像のようなトルソだった。一五〇センチくらいのリアルな少女の石膏立像だ。十三、四歳ぐらいだろうか。少女は目を閉じて後ろ手を組んだ姿で、細部まで実に生々しくリアルに作られていた。

ただ、彫刻の持つ勢いやデフォルメの感触がまったくなかった。

肉は外部から圧迫され、表面は白くがさつき、包帯で巻かれたミイラのように停滞していた。そこにはデスマスクの持つ、何か悲劇的な死臭のようなものすら感じられた。

ふと気がつく、窓ガラスの上に青白い蛾がそれぞれ向きを変え幾匹も貼りついてた。羊歯類の葉のような細かい触覚と、肉感のある繭のような太った雪色の胴体が生々しかった。私は月光を蒼白く浴びて幽霊のようにぼんやりと浮かび上がる石膏像の前に、しばらく佇んでいた。蠅人形めいた立体像に、戦慄に近いものを感じた。

真相が分かってくるにつれ、背筋に冷たいものが走った。

これはひょっとして、トモエの身体をまるごとじかに型取った石膏像ではないのか。あの老教師は、こんな人里離れた廃村で一体何をやっていたのだろうか。

月光の射し込む理科室の床には、トモエその人が佇んでいるかのような影がくっきりと映っていた。

奇妙な考えだが、私にはこの石膏像がこの谷全体の秘密の中心部のように錯覚された。そしてこの『ニフの小部屋』と称するモノマニアめいた部屋が、しだいにあの仙人や隠者のようにも思われる柘植老人の妄執の牢獄のように見えてきた。

窪地の熱帯夜の蒸し暑さと、蚊の攻撃と、異様な気持ちの高ぶりに耐え兼ね、私は息苦しくなって、廊下に出た。できるだけ戸の音を押さえて閉め、足音を悟られないようにして部屋に戻ってきた。寝ている純子の隣で横になってからも、月の光を浴びた幽体のような石膏像のシルエットが、いつまでも脳裡から離れなかった。

*

朝、目が覚めると明るい廊下の方から、オルガンの音が響いていた。バッハの静かなフーガ

曲だ。柘植老人が教室で弾いているらしい。静かで直線的で透明な旋律だった。朝の学校の静謐な雰囲気、よく調和していた。壊れかけたオルガンでも、何か心を動かされるものがあった。

私と純子はバックの中から洗面用具を取り出して、裏の井戸のところへ行って冷たい地下水で顔を洗った。高い梢では、すでに油蟬がしきりに鳴いていた。下の谷から、豪雨のような水音が響く。私は夕べ目撃した光景を純子にいうことはやめにした。

井戸の脇に、土色をした大きな甕があった。

何げなく中を覗くと、浮草とあおみどろでドロドロになっていた。その中をボウフラが、小さな体を一瞬ずつ丸めたり伸ばしたりしながら、水面に上がったたり降りたりの動作を繰り返していた。蚊の発生源だった。私はその澱みを見ているうちに、何か得体の知れない吐気のようなものを感じてきた。

裏庭ではたくさんのグラジオラスが、血のように紅いリボン状の花を垂らしていた。

渡り廊下を戻ってくると、柘植老人がオルガンを弾いている後ろ姿が見えた。朝の透明な光が教室に斜めに差し込み、教会のオルガン奏者のような老人の影が蒼く床に伸びて、どこか瞑想的な雰囲気が漂っていた。

部屋で休んでいると、トモエが戸を開けて、白い顔を覗かせた。

「お客さま。昨夜は、よく、お眠りになれましたか。朝食の、ご用意が出来ました」

まるで暗唱するように、トモエがいった。

朝食は、外のテラスでとった。パラソルの下に絵皿が並んだ。メニューは目玉焼きと小魚と山菜の漬物だった。すでに日差しは強かった。檜の樹の半透明の葉陰が、さらさらとパラソルに戯れた。

「今日は、どうされます？ もしお昼までいらっしゃるなら、トモエが鶏を一羽つぶすといっています。肉の中にご飯を入れて、河原の石を掘って蒸し焼きにするんです。おいしいですよ」と柘植老人がいった。

私はギョツとして、断るように手を振った。しどけない格好をした狂女が、放心した表情で鶏の首を捻る陰惨な映像が、頭をかすめた。

白い羽根が、埃のように舞い上がる。

「いえ、あの、かまわないでください。今日はこれから、駒ヶ根の方を車でゆっくり廻ってみたいと思ってるんです」

「あら、勝手に決めてる」純子は腕組みしながら小声で抗議するようにいった。

「そう、ですか。ちょっと残念だな。釣りでもお誘いしようかと思ったんだが。いえ、穴場があってね」

「お客さん」とトモエが目を大きく見開いていった。「それじゃ、来週、また来てください」

彼女は私たち二人を、代わる代わる見た。

裏切っては済まないような瞳だ。

トモエは新しい浴衣を着せられ、背中には昨夜と同様に丸い団扇を垂直に差していた。すっき

りとした足に履いた大きすぎるボロボロの運動靴は、埃にまみれていた。

「そうね。来週は無理だと、今度は誰かこういうところの好きな友達を連れてくるわ。日蕨テラス、だったわよね」 純子が首を傾げて微笑んだ。しかし私の笑顔はぎこちなかったと思う。

すでに日は高く昇っていた。

車が出る時も、柘植老人とトモエは、下の道まで見送りに出てくれた。

振り向くと、二人は挨拶をして、手を振った。

土手の庚申塚の脇を大きく右折しようとするとき、トモエが小走りにやってきて、手に何か光るものを握りしめ、一本の大きなヒマワリの茎を、素早く斜めに切った。

デコイ製作用のカッターか小刀を持ってきたのだろう。赤ん坊の頭ほどもあるヒマワリの花は、途中で大きく折れて、下にぼとりと落ちた。

トモエは、長い茎のついたままの大きくて頑丈な花を、綱引きの綱のように抱えて車まで追いつくと、車の窓から押し込むようにして、われわれに渡した。

純子はびっくりしながらも「ありがとう」と上機嫌で答えた。

しかし、私はいいようのない違和を感じた。ヒマワリの花がどこか人の首のように思われたのだ。純子は、子供の背丈ほどあるヒマワリの花の茎を膝の間に挟んで、黄色い花びらやコーヒ一色の種をいじっていた。

車が走りだそうとすると、また例の野生化した鶏どもが、土埃を散らしてパッと舞い上がり、慌てふためいて道の左右に逃げていった。樹の上の暗がりにも、数羽とまって小首を傾げていた。振り向くと、トモエが手を大きく振っていた。その一段上の土手で、老人がこちらを見ている。

車は廃村の中を徐行して行った。あの小学校以外は、やはりまったくの無人のようだった。茶色い痴のような民家が、生い繁った夏草の間から、暗い戸口をこちらに向けていた。

「ふうん。何だか、不思議なとこだったわね」純子は満足そうにいった。

「手作りの宿って感じ？ ……好きなヒトは、好きかもね」

「ああ」私は複雑な気持ちで答えた。「ずいぶん歓迎して貰ったもんなア」

「あのお爺さん、いいヒトじゃん。そりゃあ、不幸な事件だし、教育者として問題があったかも知れないけど、それは結果論よ。年齢差とかじゃなくて、ああいう男と女の出会いの形があってもいいのかもね。あたしはそんなに、偏見ないわ」

私は無言でハンドルを握っていた。いつか、柘植老人も亡くなる日が来る。そのときトモエはどうなるのだろう。

「ねえ、亮ちゃん、どうしたの。やたら蚊に食われてる。首のあたり真っ赤じゃん。アハハ、馬鹿みたい」

「タベトイレに行ったとき、凄い蚊の群れに襲われたのさ」

そういわれてから、急に疼くような痒さが蘇ってきた。純子は手を伸ばして、旅行用の救急箱

から、虫さされの薬を取り出した。

車高の高い車が、大きくゆれた。左右から、大量の夏山の緑が押し寄せてくる。

S字型に曲がった溪流の上の石橋を、4WDのワゴン車はゆっくりと通り過ぎる。溪流の音が激しく聞こえた。小学校の校舎は、だいぶ小さくなっていた。

土手では大小さまざまなヒマワリが、夏の午前の風にあおられていた。

それらは廃村の秘密を守るため、黄色い花をこちらに向けて無言で監視しているように思われた。

(了)

月とオルガンの宿

<http://p.booklog.jp/book/21901>

著者 : Grasshouse

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/21901>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/21901>